

聖隷だからできた体験

聖隷の5つの使命を日常業務の中でどのように実践しているか、職員に聞きました。



聖隷三方原病院 医事課
事務職 吉林詩織さん

利用される人々のために

障がいを持つ人々に対する支援の環境を

聖隷三方原病院 地域障がい者総合リハビリテーションセンターが2019年11月に開設しました。そこで私は受付や会計を中心に業務を行っています。当センターにはさまざまな障がいを抱えた方が来院され、リハビリや障がい者スポーツなどを通して充実した生活が送れるよう前向きな支援がされています。そしてユニバーサルデ

ザインを積極的に取り入れた設備があり、私自身もそのような設備から障害のない環境の作り方に理解を深めることができました。実際の業務でも接遇を通して様々な方に対して障がいのある方を理解し、配慮することを心がけています。聖隷の職員として、また1人の医療人として成長が来ていると感じています。

INTERVIEW



聖隷浜松病院 放射線部
診療放射線技師 上島佑介さん

最高のものを

医療は進歩し続けるからこそ、最善を尽くす

聖隷浜松病院の理念に、こんな一節があります。「最善を尽くすことに誇りをもつ」入職当時の私は何も考えず、ただ呪文のように唱えていました。時が経ち、聖隷は日々成長を続けています。私が所属する放射線部だけでも、造影検査の新たな手法が業務拡大され、核医学検査の新たな薬剤が採択され、最新のCT装置や放射線治療装置が導入されました。これらの成長は、医療

の進歩に伴うものです。医療が進歩すれば、その時その時の最善も異なります。過去の最善に後悔しても、戻ってやり直すことはできません。未来の最善でいることでしょうか。では、現在の最善とは――。「その瞬間その瞬間の最善を尽くす」ことではないでしょうか。きつこの積み重ねが、後に誇りとなるのだと思います。

いのちと尊厳のために

つながりの看護



聖隷淡路病院 4階病棟
看護師 酒井友理さん

私は淡路島生まれの淡路島育ちです。聖隷淡路病院に就職したのは淡路島の発展に医療や看護から少しでも貢献できればという思いからでした。私含め職員もまたその地域の住人。親戚や兄弟の同級生、友人など顔見知りの方の入院が多いです。抗がん剤治療や終末期での自宅療養中調子が悪くなり入院を繰り返す患者様や、島外への通院を辞め自宅から近い聖隷淡路病院への通院を望まれる患者様も多く、地域住民の精神的な支柱となっていることを実感しています。退院後に職員より「○○さんまた自転車乗り回しとったで!」と、元気に過ごされている様子を聞く嬉しく、ほっこりした気持ちになります。聖隷淡路病院は職員・患者様が穏やかにつながり合い、自然な形で隣人愛に溢れている環境があります。これからの一員として関わっていきます。

INTERVIEW

最高のものを

常に最高の質を求めたトレーニング

聖隷横浜病院の臨床工学室は若手スタッフが多く、明るくチャレンジ精神旺盛な雰囲気と、専門職としての高いモチベーションを持って業務に取り組んでいます。2015年5月、心臓血管センター内科が開設され、複雑で緊急性の高い症例が増えることになりました。その頃から心臓カテーテル業務の質を上げるために一致団結し、心臓カテーテルのトレーニングに取り組んできました。トレーニングでは、カテーテル室

にあるデバイス(装置)の使用方や、急変時に活躍するPCPS(補助循環装置)の導入練習などを行っています。定期的にトレーニングを積み重ねた結果、症例数が少ないPCPSであっても落ち着いて準備・導入することができています。私たち臨床工学技士は、今後ともトレーニングを重ね、安全で質の高い医療サービスを提供し続けます。



聖隷横浜病院 臨床工学室
臨床工学技士 杉村 淳さん

INTERVIEW

いのちと尊厳のために

多職種で高齢者骨折治療



聖隷佐倉市民病院 整形外科
部長 医師 岸田俊二さん

当院では大腿骨近位部骨折の多職種連携治療に取り組んでいます。本骨折は高齢者に多く、歩行障害の可能性は当然ですが、肺炎や褥瘡などの合併症で命の危機にさらされる外傷です。治療の困難さを痛感していた私は整形外科医単独ではこれらの問題を解決できないと考え、他科医師やメディカルスタッフ、事務職とのミーティングを定期的に行い早期手術が始まりました。その後の話し合いのなかで誤嚥性肺炎対策やせん妄ケア、二次骨折予防の骨粗鬆症治療に発展しました。それぞれの職種が自分の専門分野を活かして高齢患者の医療的、社会的問題解決に取り組む。職種を超えた職員同士の繋がりが強い聖隷の気風がこの取り組みを可能にしたと思います。骨折をしても自分の足で歩くことを諦めない、そんな思いにチームで応えたいと思っています。

INTERVIEW

未来を築く

リハビリテーションロボットと築く未来



浜松市リハビリテーション病院 リハビリテーション部
係長 理学療法士 飯尾晋太郎さん

2足歩行ロボットであるホンダASIMOが登場した2000年当時、高校生であった私はテレビ画面の中を「歩く」ロボットの姿に心を躍らせていました。それから20年、今では理学療法士として、再び人が「歩く」ための難しさと日々向き合いながら働いています。近年、様々な医療機器の開発が進み、医療・介護現場に新しい波が押し寄せてきています。当院においても、2020年2月に歩行支援を目的としたリハビリテーションロボットであるウェルウォークWW2000を導入し、今、新たな挑戦に一步踏み出したところです。再生医療とリハビリテーションロボットを組み合わせた治療により、脳卒中を「完治」させる未来も示唆されており、我々の取り組みは大いに期待されています。今後、常に未来へ向かって挑戦し続ける姿勢を魅せ続けていきたいです。

利用される人々のために

患者家族の思いに寄りそう 退院支援



聖隷袋井市民病院 3階病棟
みずの えい こ
係長 看護師 水野英子 さん

私が勤める回復期リハビリテーション病棟では、自宅退院された全患者様に電話で退院後の様子の聞き取りを実施し、入院中の指導が適切であったか、退院後も安全に暮らすことができているかを確認しています。

家族と本人の意向が異なっていたため方向性が定まらず退院支援に難渋しましたが、自宅退院したA氏に電話をしたところ、入院中には聞かれたこともないような明るい声で「自分の家で気持ちよく生活できていますよ！」と意見を聞くことができました。家族からも「心配していたけれど自宅退院を選んで本当に良かった。」と発言がありました。

患者様だけではなく、その患者様をとりまく人々も「利用される人々」として関わることによって患者家族が満足した退院支援となりました。今後も「利用される人々」が満足できるようにその人々の思いを丁寧に聴取して退院支援をしていきたいです。

畑を通じて心豊かに



在宅・福祉サービス事業部 聖隷こども園こうのとり富丘
しんむら あやか
保育教諭 新村彩華 さん

園の駐車場片隅の畑で育つ野菜。子どもが日中や登降園時に水やりや草とりをし、大切に育てられています。今年もエンドウ豆やスイカ等10種類以上の野菜が収穫できました。しかし以前は、手をかけても野菜が育ちませんでした。その姿に悩み、私たちは地域の野菜栽培士のBさんの力を借りることにしました。Bさんは心よく協力して下さり「畑は土作りが基本」と土作りから手とり足とり、子どもにも保育者にも一生懸命教えてくれました。1年、2年と経つうちに、皆が自然とBさんにさらに信頼を寄せられるようになりました。いつも「Bさんに信頼を寄せようになりなりました。いづもジープパンだよ！」と嬉しそうに話す子どももいます。子どもたちにはBさんが畑のことをなんでも知る「畑博士」に見えてくるようです。畑での出来事を通して、地域の人も子どもたちの育ちに関わることは、子どもに豊かさを与えていくと実感しています。

地域社会とともに

近年、介護ロボットやAI技術を取り入れたサービス開発が進んでいます。現場における人員不足は重大な課題です。その解決には、ロボット等を取り入れることは必須となりますが、そこには心があるのでしょうか。介護の仕事には何が一番大切なのでしょう。私は心(愛)が一番大切だと思います。目線を合わせ気持ち伝える。人の手の温もり。何を考え、何を求めているのか。言葉にはできない気持ちを想像す

地域社会とともに

行政保健師と連携した 受診率向上の取り組み



保健事業部
地域・企業健診センター 健診看護課
やました えり
保健師 山下恵莉 さん

当施設が巡回健診を受託しているA市保健師から「大腸がんによる死亡者11人のうち10人は検診を受けていなかった」「検診も受けずに大腸がんで死亡する人を減らしたい」という相談がありました。これを受け、行政との連携を強化し大腸がん受診者数アップ及び、精密検査受診率向上に取り組みました。その結果、2014年度大腸がん検診受診者数は、2013年度より416人増加し9,375人、うち919人は初回受診でした。精密検査受診率は、2013年度68.0%から2014年度73.5%へ増加し、20人の大腸がん発見に繋がりました。行政と健診機関の協働・連携する取り組みが、地域住民の健康保持・増進に寄与できることを認識しました。今後も行政と連携した保健事業の展開を目指し、がんによる死亡率減少・健康寿命の延伸の一助を担ってまいります。

未来を築く

介護の現場で一番大切なこと



高齢者公益事業部 油壺エデンの園 ケアサービス課
いたがし りょうすけ
係長 介護福祉士 板越 陵 さん

る。それを相手が理解して、関わってくれたのであれば、心は満たされるでしょう。やはり、人でないといけない関わりがあると思います。私はそのことを理想に、介護現場でケアを行っています。勿論、まだ至らぬことだらけだと思いますが、職員が皆そのような気持ちでケアを提供できれば、今以上に介護現場に明るい未来が築かれるでしょう。